

中学生を対象としたQ-Uの活用に関する実践的研究

—教員の意識調査およびQ-Uのデータ分析から—

吉田 圭吾・下田 芳幸・石津憲一郎

中学生を対象としたQ-Uの活用に関する実践的研究

—教員の意識調査およびQ-Uのデータ分析から—

吉田 圭吾*・下田 芳幸・石津憲一郎

A Practical Study about Q-U for Junior High School Students

Keigo YOSHIDA, Yoshiyuki SHIMODA, and Kenichiro ISHIZU

キーワード：中学生, Q-U

Keywords：Junior High School Students, Q-U (Questionnaire-Utilities)

I 問題と目的

文部科学省（2010）の調査によれば、平成20年度において、いじめの認知発生件数が、全国において約10万件に及んでいる。校種別にみると、中学校は約4万3千件と全体の半数近くを占めており、発生件数が多くなっていることがわかる。さらに、中学校での年間30日以上欠席した不登校生徒数が約10万人にものぼり、これは、全生徒数の2.9%、34人に1人の割合でいることが明らかになっている。つまり、データ上、1学級に1人不登校生徒を抱えていることになる。また、富山県においてもそのような傾向は強く、平成19年度の調査によると、いじめの発生認知率、不登校の発生出現率とも、小学校、高等学校に比べて、中学校の割合が非常に高くなっている状況である。

では、どうしてこのような状況になっているのであろうか。その背景として、子どもたちを取りまく環境の変化があげられる。学校の小規模化や子どもの少子化が進む中、多くの子どもたちは、限られたせまい人間関係の中で育ってきている。このため、社会性や規範意識の低下が見られ、また、自分の考えや気持ちを上手に相手に伝えたり、相手の気持ちを考えて行動したりするなどの人間関係づくりのうえで大切なコミュニケーションを苦手とする生徒が増えてきている。特に、不登校におちいるきっかけとして、いじめを含む「友達との人間関係のつまずき」が原因となっていることが少なくない。つまり、不登校やいじめも、人間関係の問題と捉えることができるであろう。そしてその結果、従来機能していた学級集団の自治力や教育力が低下し、学級経営が以前と比べて困難になってきていることが現場においても実感される。

学校においてこのような問題に対応するためには、生徒の学校生活の基盤となる学級において、考えや思いが

違っていても、生徒同士がお互いに助け合い、支え合うための集団づくりが求められる。そのためには、お互いに信頼できる好ましい人間関係（教師と生徒、生徒同士）を築いていくことが大切である。そして中学校は教科担任制が基本で、教師集団のチームワーク（連携・協同作業）が前提となっており、「学年」を単位とする教育活動が多く見られる。したがって、学級における好ましい人間関係作りに際しては、担任教師だけにこの問題を任せるのではなく、学年の教師のチームワークによる取り組みの方がより効果的であると考えられる。

「楽しい学校生活を送るためのアンケート（Q-U）中学校用」は、生徒の学級生活での満足感と意欲、学級集団の状態を把握するためのものであるが、学級ないし学校適応を促すための人間関係作りに有用であるとして、多くの現場で活用されている。関連する図書も多く出ており（例えば河村，2006；河村ら，2004）、富山県でも多くの小中学校で実施されている。しかしながら、その結果を十分活用しきれていないという現状も一方である。調査などにより具体的に示されたものはないが、筆者らが経験したQ-U実施校では、教師より「データの読み取り方が分からない」、「教師自身が気になる生徒とデータとの関連が分からない」、といった内容の問題点がしばしば聞かれる。しかしながら、これらの課題に関する実態調査あるいは実践報告については、これまでのところ見あたらない。

以上のことから本研究では、Q-Uを毎年、年2回実施しているA中学校を実践例とし、Q-U活用上の問題点として考えられる2つの側面、すなわち①教師がQ-Uの活用際に抱えている課題や、Q-Uの研修会を通してその課題が解消されるのか、という点（研究1）と、教師が気になる生徒のQ-Uの特徴に関する基礎データを収集すること（研究2）を目的とした。

* 砺波市立出町中学校

Ⅱ-1 研究1：Q-Uに関する教師の意識調査

1. 目的

これまで報告の見られない、Q-Uに対する教師の意識を調べるため、Q-Uを活用した研修会において、Q-Uに対する意識調査を行った。

2. 方法

1) 調査協力者

公立A中学校1年生の担任8名、副担任4名

2) 調査時期

X年7月上旬

3) 調査内容

(A) Q-Uに対する教師への事前アンケート調査：本研究の目的に合わせて、Q-Uの活用に関する項目を独自に作成した。

(B) 研修会を終えてのアンケート：本研究の目的に合わせて、Q-Uの活用に関する項目を独自に作成した。

4) 手続き

7月上旬に行われた1学年の職員研修の前に、事前アンケートを実施・回収した。職員研修では、事前調査を踏まえたQ-Uの読み取りと活用に関する講義を第一著者が実施した。なお本研究では触れないが、職員研修では、Q-Uの肯定的変化を目的としたエンカウンター・グループについて、クラスの実情に合わせて学級ごとに計画し、後日担任によって計画に沿った実施がなされた。職員研修に関する事後アンケートは、エンカウンター・グループの感想記述を求めた際に合わせて実施した。

3. 結果と考察

まず、Q-Uに対する教師への事前アンケート調査の結

果は、以下のようになった。

①『Q-Uの読み取りに困っているか?』（担任8名が回答）

・「困っている」と答えたのは4名で、いずれも新採や中堅の教師であった

②『Q-Uの読み取りで困っている内容は何?』（①で「はい」と答えた人のみ、自由記述）

・Q-Uの見方が分からない

・Q-Uの結果を生かしきれていない

・データの読み方、生徒への具体的な手だての方法が分からない

③『Q-Uで知りたいことは?』

・問題のある生徒への具体的な対策

・分析結果を学級経営に生かす方法

・侵害行為認知群、非承認群、学級生活不満足群の生徒のとらえ方とその対策

以上から、経験年数の少ない新採や、中堅の教師を中心に、Q-Uのデータが意味する内容や、具体的な手だてに関する情報を必要としている可能性がうかがわれた。したがって、1学年の職員研修では、Q-Uのねらいや結果の見方に関する資料を作成し、学年全体に説明を行った。加えて、3名ずつ4グループを作り、資料やデータをもとに、各学級の集団の傾向や気になる生徒の分析、実態把握を行った。さらに、6名ずつの2グループを作り、第一著者と本校のカウンセリング指導員とが各グループでアドバイスをを行った。各学級の集団の状態や学級で一番気になる生徒の実態把握から、資料を参考に、今後の支援・対応策を決定した。

研修会を終えてのアンケート結果は、表1の通りであった。

Q-Uの学級満足度尺度は学級集団・個人の実態の把握

表1 「研修会を終えてのアンケート」の結果（担任8名、副担任4名）

「Q-U」の結果の見方や活用の方法が分かりましたか。	よく 6	分かった 6	あまり 0	分からなかった 0
学級満足度尺度の結果は学級集団の理解に役立ちましたか。	大変 4	役立った 8	あまり 0	役立たなかった 0
学校生活意欲プロフィールは生徒理解に役に立ちましたか。	大変 4	役立った 6	あまり 2	役立たなかった 0
学級集団への理解と個人の支援の研修は役に立ちましたか	大変 4	役立った 8	あまり 0	役立たなかった 0
学年全体として研修に取り組むことはよかったですか	大変 11	よかった 1	あまり 0	よくなかった 0
この研修を通して、生徒への見方は変容しましたか	大変 1	変わった 8	あまり 3	変わらなかった 0
この研修を通して、対応方針を思い浮かべることができましたか	よく 2	浮かんだ 8	あまり 2	浮かばなかった 0

に役だった、と感じている教師が高い割合であることがわかった。以前までは、生徒の実態を教師の観察や面接などからの情報をもとに把握するという手法が現場では主流であったが、「生徒への見方は変容しましたか」という質問に3/4の教師が「変わった」と答えていることから、客観的なデータによる実態把握を加味することで、今まで見えてこなかった生徒の別の一面が明らかになったと考えられる。そのため、研修会では、明らかとなった生徒の別の一面をベースに、より具体的な生徒への対応策が話し合われ、今後の対応の方法がはっきりとした教師も多く見られた。

また、学年での研修という形をとることで、教師が同じ生徒に関する意見を出し合えた。その結果、生徒理解のみならず、教師の学年に対する所属感、凝集性も高まっている様子が見えてきた。

今回の実践例である A 中学校では、毎年 2 回 Q-U を実施しているが、調査をするだけに終わらず、こういった研修の機会をとって結果の分析をしっかりと行うことで、さらなる効果が期待されると思われる。

Ⅱ-2 研究 2：担任が気になる生徒の Q-U およびソーシャルスキルの各尺度得点の特徴

1. 目的

クラス担任が日常の観察から把握している“気になる生徒”について、Q-U およびソーシャルスキルの得点による特徴を把握する。

2. 方法

1) 調査協力者

公立 A 中学校の 1 年生 8 クラス（男子 126 名、女子 126 名）であった。

2) 調査時期

X 年 5 月下旬

3) 調査内容

(A) 楽しい学校生活を送るためのアンケート (Q-U) 中学生用 (河村, 2006; 河村ら, 2004): 学級満足度尺度 20 項目と学校生活意欲度尺度 20 項目からなる。

(B) ソーシャルスキル自己評価尺度 (相川ら, 2006): ルール遵守, 聴くスキル, 基本的な声かけ, 配慮のスキル, 主張スキル, 誘う・入るスキル, トラブル解決スキルの計 21 項目からなる。

(C) 中学生用社会的スキル尺度 (嶋田 1998): 3 つの下位尺度のうち、本研究の目的に合わせて、引っ込み思案行動と攻撃行動の計 15 項目を使用した。

4) 手続き

ホームルームの時間を用いて、担任により一斉に配布・回収された (記名式)。

3. 結果

1) 担任への学級で気になる生徒の調査

まず、学級で担任が気になる生徒を複数人挙げてもらった。ついで、Q-U の実践経験が豊富な現職教員 1 名とともに、生徒の特徴別にカテゴリー化を試みたところ、以下の 5 群に分けられた。

- (A) 自由気まま、攻撃的、善悪の判断が弱い生徒 (以下、奔放群)
- (B) 自分の意見がなかなか言えない生徒 (以下、非主張群)
- (C) 周りに合わせすぎる、周りの視線を気にしすぎる生徒 (以下、迎合群)
- (D) 友達関係がうまくいかない、孤立・孤立気味の生徒 (以下、孤立群)
- (E) 学級でよくやってくれる、助けてくれる生徒 (以下、手助け群)

2) 学級満足度尺度における担任の気になる生徒各群の特徴

担任の気になる生徒の各群の学級満足度得点の特徴について検討するために、各群を独立変数とする 1 要因分散分析を行った。学級満足度尺度の各群の平均値、標準偏差をまとめたものを表 2 に示す。

その結果、承認得点、被侵害得点それぞれにおいて、群の主効果が有意であった (それぞれ $F(5,256)=7.26, p<.01$; $F(5,255)=8.97, p<.01$)。

多重比較の結果、承認得点においては、奔放群、手助け群が、非主張群、迎合群、孤立群より得点が高いことが示された。すなわち奔放群と手助け群は、非主

表 2 学級満足度の各群の平均値、標準偏差および分散分析結果

	奔放群 (N=11)	非主張群 (N=13)	迎合群 (N=6)	孤立群 (N=11)	手助け群 (N=16)	全体 (N=197)	F 値
承認得点	38.18 (8.29)	30.08 (7.18)	27.50 (12.91)	27.18 (10.23)	41.06 (6.03)	37.25 (8.14)	7.26**
被侵害得点	19.27 (11.46)	23.38 (11.33)	26.17 (12.12)	28.73 (10.03)	19.75 (10.14)	15.78 (7.29)	8.97**

** $p<.01$

表3 担任が気になる生徒各群と Q-U の 4 領域における人数の分布

	満足群	非承認群	侵害行為 認知群	不満足群	合計
奔放群 (人数) 調整済み残差	8 2.4	0 -1.5	1 -1.0	2 -0.7	11
非主張群 (人数) 調整済み残差	2 -2.1	5 2.9	3 0.4	3 -0.3	13
迎合群 (人数) 調整済み残差	2 -0.4	0 -1.0	1 -0.2	3 1.4	6
孤立群 (人数) 調整済み残差	1 -2.4	2 0.4	2 -0.1	6 2.4	11
手助け群 (人数) 調整済み残差	10 2.1	1 -1.1	4 0.7	1 -2.1	16
合計 (人数)	23	8	15	15	57

張群、迎合群、孤立群よりも級友や先生など周りから認められていると感じていると考えられる。

被侵害得点においては、非主張群、迎合群、孤立群が、奔放群、手助け群よりも得点が高いことが示された。すなわち、非主張群、迎合群、孤立群は、奔放群、手助け群よりも学級不適応感やいじめ・冷やかしなどを受けていると感じていることが推測される。

続いて、担任が生徒各群とQ-U学級満足度の4領域との関連を検討するため、カイ2乗検定を行ったところ、人数の偏りが有意であった ($\chi^2(12)=26.66$, $p<.01$)。結果を表3に示す。

分析の結果、奔放群は満足群に偏る傾向が、非主張

群は非承認群に偏り満足群に偏らない傾向が、孤立群は不満足群に偏り満足群には偏らない傾向が、手助け群は満足群に偏り不満足群に偏らない傾向が示された。

3) ソーシャルスキルの各尺度における担任の気になる生徒各群の特徴

担任の気になる生徒の各群のソーシャルスキル自己評価尺度・中学生用社会的スキル尺度得点における特徴を検討するために、各群を独立変数とする1要因分散分析を行った。ソーシャルスキルの各尺度得点の平均値、標準偏差をまとめたものを表4に示す。

その結果、基本的な声かけ、配慮、主張、誘う・入

表4 学級満足度の各群の平均値、標準偏差および分散分析結果

	奔放群 (N=11)	非主張群 (N=13)	迎合群 (N=6)	孤立群 (N=11)	手助け群 (N=16)	全体 (N=197)	F 値
ルール 順守	10.82 (1.54)	10.54 (2.40)	10.67 (1.51)	10.82 (1.78)	11.56 (0.89)	11.04 (1.25)	1.06
聞く	7.45 (0.82)	6.46 (0.78)	6.00 (0.89)	6.18 (1.08)	7.00 (1.10)	6.80 (1.28)	1.98
基本的な 声かけ	14.45 (1.44)	10.46 (2.67)	10.00 (3.35)	10.00 (3.10)	14.13 (1.54)	13.32 (2.12)	12.68**
配慮	20.45 (2.95)	18.08 (3.10)	19.00 (4.52)	17.64 (3.47)	21.81 (2.46)	20.55 (3.29)	3.79**
主張	13.09 (1.64)	11.15 (2.64)	12.50 (1.38)	10.82 (3.19)	13.44 (2.42)	13.09 (2.27)	3.77**
誘う・ 入る	10.00 (1.73)	9.08 (2.18)	7.83 (1.47)	6.91 (3.02)	9.69 (1.20)	9.49 (1.89)	4.91**
トラブル解決	5.45 (1.13)	4.85 (1.14)	5.33 (1.37)	4.64 (1.12)	5.31 (1.15)	5.54 (1.50)	1.38
引込思案 行動	12.09 (4.39)	14.85 (5.86)	17.17 (2.93)	22.00 (5.87)	12.88 (4.19)	11.38 (3.75)	17.75**
攻撃行動	14.27 (4.78)	11.85 (2.48)	10.50 (4.32)	11.27 (3.98)	9.94 (2.44)	10.70 (3.42)	2.74**

** $p<.01$

る、引っ込み思案行動、攻撃行動の各スキルにおいて、群の主効果が有意であった（順に $F(5,253)=12.68, p<.01$ ； $F(5,253)=3.79, p<.01$ ； $F(5,253)=3.77, p<.01$ ； $F(5,253)=4.91, p<.01$ ； $F(5,253)=17.75, p<.01$ ； $F(5,253)=2.74, p<.01$ ）。

多重比較の結果、基本的な声かけスキルについては、奔放群、手助け群が非主張群、迎合群、孤立群より得点が高く、奔放群および手助け群は、非主張群、迎合群、孤立群よりも友人に積極的に声かけを行っていることが示された。

次に、配慮スキルについては手助け群が非主張群、孤立群より、奔放群が孤立群より得点が高く、手助け群および奔放群は、孤立群より、そして手助け群は非主張群と比較しても、友人に配慮していることが示唆された。

主張スキルについては、奔放群、手助け群が非主張群、迎合群、孤立群より得点が高く、奔放群および手助け群は、非主張群、迎合群、孤立群よりも友人に主張することが示唆された。

誘う・入るスキルについては、奔放群、手助け群が非主張群、迎合群、孤立群より得点が高く、奔放群および手助け群は、非主張群、迎合群、孤立群よりも友人を誘ったり、自分から仲間に加わったりすることが示された。

引っ込み思案行動スキルについては、孤立群＞迎合群＞非主張群＞奔放群、手助け群という結果であり、孤立群は他の4群より、引っ込み思案で消極的であることが示された。また、奔放群および手助け群は、孤立群・迎合群・非主張群より、引っ込み思案ではないこともうかがわれた。

攻撃行動スキルについては、奔放群が迎合群、孤立群、手助け群より得点が高く、奔放群は、迎合群、孤立群、手助け群よりも攻撃的であることが示された。

4. 考察

教師が気になる生徒は、Q-Uおよび社会的スキルにおいて、以下の特徴を有していると考えられる。

1) **奔放群**：学級生活満足群に高い割合で分類される傾向があることから、学級生活を満足した状態で送っていると考えられる。また、ソーシャルスキルの基本的な声かけ、配慮、主張、誘う・入る、攻撃行動の各スキル得点が高いことから、友人と積極的に関わっているが、その一方で、友人に対するいじめや暴力等の行動の危険性が考えられる。

学級満足度尺度におけるデータ分析の結果は、後述する手助け群とほぼ同じ傾向である。河村(2006)は学級満足度尺度の学級生活満足群にプロットされた子どもの特徴として「不適応感やトラブルが少なく、学級生活・活動に満足し、意欲的に取り組んでいる子ども」と指摘しているが、実際、善悪判断が弱い奔放群のような生徒は、

学級で自分の好き勝手にふるまう一方、トラブルを引き起こすことが多く見られ、担任の見立てとQ-Uからみる生徒の実態にずれがあるといえる。

つまり、学級満足度尺度の各群にプロットされている生徒においては、各群の大まかな特徴を捉えながらも、一人一人の細かい分析が必要になってくるであろう。

また、ソーシャルスキルのデータ分析の結果も手助け群とほぼ同じ傾向ではあるが、奔放群は攻撃性が高いという点において手助け群と異なっていた。河村(2007)は、「規範意識が低い子どもの傾向として、攻撃性と対人積極性が高い」と指摘しているが、今回の分析もこの指摘を支持するものであった。さらに、「そのような子どもは、暴力や身体的ないじめなど攻撃的な非行に陥りやすいといわれている傾向である」とも指摘している。したがって、奔放群に該当するような生徒の実態をしっかりと把握した上で、攻撃行動を弱め、相手の気持ちを理解できるような人間関係づくりに関わるスキルを高めていく支援が必要になってくると考えられる。このような攻撃行動が弱まると、学級においてより活躍する可能性を秘めていると言えるであろう。

2) **非主張群**：非承認群に位置しやすい傾向が示された。すなわち、学級生活であまり認められることがなく、また、意欲も低いことがうかがえる。さらに、ソーシャルスキルの基本的な声かけ、配慮、主張、誘う・入る、の各得点が低く、引っ込み思案行動が高いことから、教師の捉える生徒像と生徒自身の自己イメージが一致しているともいえる。自分の思いを相手に伝えることが苦手で、友達とのかかわりが消極的であると考えられることから、アサーショントレーニングが有効であると考えられる。その中で、少しずつ自分の意見を表明できるようになったり、あるいは教師側が積極的によさを見つけて伝え返したりするなど、学級内で認められる場面を設定することで、学級に認められ、受け入れられている、という実感を積み重ねていくことが有効であると考えられる。この特徴は、担任の見立てとほぼ一致している。

3) **迎合群**：学級満足度尺度の各群に偏りは見られないことから、どの群にもプロットしている可能性が高い。すなわち、学級満足度尺度だけでは、この群の特徴をとらえられないので、生徒一人一人の普段の様子を丁寧に観察する必要があると考えられる。ソーシャルスキルにおいては、基本的な声かけ、配慮、誘う・入る、の各スキルが低く、引っ込み思案行動が高いことから、非主張群と傾向が似ており、一見良好な対人関係を築いているように見えながらも、人とのかかわりが苦手で、消極的であると考えられる。したがって、非主張群と同様に、アサーショントレーニングや努力を認められる体験が有効であると思われる。

4) **孤立群**：不満足群に高い割合で位置する傾向にあることから、学級での生活に不適応気味であり、自分の居場所が見いだせずに苦戦している可能性が高い。ソー

シャルスキルにおいては、基本的な声かけ、配慮、主張、誘う・入る、の各スキル得点が低く、そして引っ込み思案行動が最も高くなっていることから、友人に自分からなかなか話しかけることや一緒に遊んだりすることなどが上手くできず、その結果、周りから孤立していくと考えられる。今後は、苦手としているスキルを高めるための支援や、必要に応じて個別面接を行いながら、具体的に対応していくことが必要であろう。

5) 手助け群：学級生活満足群に高い割合で分類される傾向があることから、学級生活を満足した状態で送っていると考えられる。さらに、ソーシャルスキルの基本的な声かけ、配慮、主張、誘う・入る、の各スキル得点が高く、引っ込み思案行動、攻撃行動の各得点が低いことから、友人と積極的にかわり、よりよい人間関係を作っていると考えられる。しかし、教師から見ると、やや頑張りすぎているようにも見受けられ、いわゆる過剰適応(石津, 2007, 2008)の状態にあることも考えられる。したがって、生徒自身のがんばりなどは十分認めながらも、必要以上のプレッシャーをかけないように留意した支援が必要であろう。

Ⅲ 本研究まとめと今後の課題

本研究では、Q-Uに関する教師の意識の実態を捉え(研究1)、また教師が普段の観察で直観的に気がかりである生徒の特徴を検討すること(研究2)を目的としていた。今回の実践研究を通して、Q-Uの活用につながる基礎的な資料が提供できたと考えられる。

まず、対象校ではQ-Uを毎年2回実施しているが、教員の意識調査から、得られたデータを十分に生かし切れていない可能性が示唆された。

一方で、今回のQ-Uを活用した学年研修会において、多くの教師がQ-Uの有効性を実感することができたと思われることから、Q-Uの活用においては、概論を記した関連書籍からの情報提供のみでなく、学年の研修会といった機会を通じて情報交換を行うなどの手だても必要であると思われる。さらに今後は、学年だけではなく、学校全体での取り組みへと発展させるようなはたらきかけを提案していく必要があると考えられる。

なお今回の分析にも示された通り、Q-Uの結果と担任の見立てとにズレが生じることもある。したがって、Q-Uの結果から、教師の直観的な生徒理解のみでなく、Q-Uのデータによる生徒理解を合わせ、トータル的に生徒の実態を把握していく必要があると思われる。さらにその際、担任が一人で抱え込むのではなく、学年全体で同じ問題意識を持って取り組むことにより学年の団結力が高まるといった前向きな姿勢が強まることにもつながる。さらに先述のとおり、担任の悩みを周りに話し、教師が集団として対策を考えていくことで、その生徒への共通したかかわりを図ることができる、というメリット

もある。

ただし、今回の対象校は1学年8クラスの大規模校であり、今回の実践研究を通していくつかの問題も見えてきた。1つ目は、全学級の問題の共通理解を図ることに時間がかかること、2つ目は、全員が参加できる研修会の日時を設けにくいことである。現場の教師は多忙を極めていることから、今後は、研修会の時期や内容、時間設定を考え、効果的に行える工夫に関する知見の蓄積が必要である。3つ目は、データの問題である。本研究は1つの学校の実践例であり、かつ研究2の分類では、データサイズの小さい群も見られた。したがって研究知見の一般化に向けた再検討が今後必要である。

なお、本実践研究を通して、教師が直観的に“気になる”としてとらえていた生徒の特徴も浮かび上がってきた。特に、全く違うタイプと感じていた生徒が、Q-Uおよびソーシャルスキルの得点上は共通する特徴を備えていたり、あるいは逆に、同じようなタイプと感じていた生徒にはっきりした違いがみられた。この点もまた、日ごろの様子を観察するのみでは、知り得ない状態を把握できたといえる。よって今後は、各群の特徴をふまえて、生徒一人一人の状態を細かく観察しながら、具体的な対応・支援を行っていくことが必要となるであろう。

このような取り組みを積み重ね、Q-Uを有効に活用し、よりよい生徒理解と対応を実践していくことが重要である。

＜文献＞

- 相川 充・佐藤正二(2006):実践!ソーシャルスキル教育——中学校 図書文化
- 石津憲一郎(2007):中学生の学校環境に対する主観的重みづけと学校適応——心身の適応との関係からカウンセリング研究, 40, 225-235.
- 石津憲一郎・安保英勇(2008):中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, 56, 23-31.
- 河村茂雄(2001):グループ体験による学級育成プログラム——中学校編 図書文化
- 河村茂雄(2006):学級づくりのためのQ-U入門 図書文化
- 河村茂雄・小野寺正己・粕谷貴志・武蔵由佳(2004):Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド 図書文化
- 文部科学省(2010):平成20年度 生徒指導上の諸問題に関する調査
- 嶋田洋徳(1998):小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 風間書房

(2011年8月29日受付)

(2011年10月25日受理)